

小熊英二研究会 B2 卒業論文
総合政策学部 四年
学籍番号 71008252
御手洗 拓真

日本主義的學生運動—日本學生協会の言説と実践に注目して

はじめに.....	2
一章 原理日本社について.....	5
一節 原理日本社の成立.....	6
二節 原理日本社的言説について.....	6
一項 「原理日本」という統一.....	7
二項 「世界文化単位」としての日本.....	8
三項 感得するものとしての「日本」.....	9
二章 昭和一桁代後半以降の学生の状況.....	12
一節 大正後半から昭和一桁年代まで.....	13
二節 昭和一桁代後半以降.....	14
三章 学生協会の展開過程.....	17
一節 瑞穂会と昭信会.....	18
二節 東大精神科学研究会、東大文化科学研究会の発足と小田村事件（昭和十三年を中心）.....	18
三節 正大寮設立、運動の全国展開（昭和十四年を中心）.....	19
四節 日本学生協会と精神科学研究所設立（昭和十五年、十六年）.....	20
四章 学生協会の言説.....	23
一節 指導層の言説.....	23
二節 動員された側の言説.....	25
五章 身体的で実践的な学生のための運動.....	28
一節 『伊都之男建』.....	28
一項 現状認識.....	29
二項 同信生活.....	30
二節 『学生生活』において.....	31
一項 現状認識.....	31
二項 同信生活.....	33

二節 学生協会の運動の受容のされ方	34
一項 昭和十四年における全国学生合同夏合宿参加者からの便り	35
二項 日本学生協会結成記念大講演会	37
四節 小結	39
第六章 結論	40
おわりに	40
参考文献	40

凡例

一、資料の引用に際して、旧字体は原則として新字体に改めた。

はじめに

一九三〇年代後半、四〇〇〇人に及ぶ学生¹を動員した、学生協会²という原理主義的な日本主義学生団体が存在した。1930年代は、エリートといえ左傾という大きな傾向が転換し、エリートの右傾が目立ち、半ば潮流化した時期である³。そういった一般的な右傾潮流のなかでも、特に学生協会は急速に会員を増やし、動員力を高め、一大ムーブメントになり得る存在感を獲得した。これといった著名人が深く関与している訳ではない学生協会が、である。本稿の目的は、彼らの学生運動をそれまであまり注目されていなかった側面から捉え、その運動が持った意味を明らかにすることである。

以下、まず本論に入る前に先行研究を整理する。そして本論の一章では、学生協会がその言説の型を負っているところの原理日本社という団体の言説を取り上げ、二章で当時の学生が置かれていた状況を紹介し、一、二章で学生協会について論じる前提を整理する。三章では学生協会の拡大の歴史を概観し、四章では学生協会の言説に焦点を当て、それが果たした機能を考える。五章では、学生協会の運動を身体的実践という観点からとらえ、最後に六章で、それまでの記述を総括して結論の章とする。

¹ これ以降、本稿では高等教育機関（専門学校、実業専門学校、高等学校、高等師範学校、大学、大学予科）在籍の学生を指す言葉として、学生という言葉を用いる。

² 後の章で論じるように、この団体は、一高昭信会に始まり、学内団体として東大精神科学研究会、同時期に学外団体として東大文化科学研究会となり、その後日本学生協会・精神科学研究所という二元体制に至るが、本稿では、これら諸団体を特に区別する必要を認めない場合、一括して学生協会という呼称を用いる。

³ 井上義和『日本主義と東京大学－昭和期学生運動の系譜』,パルマケイア叢書,2008.6

先行研究

ここでは、原理日本社に関するものと、学生協会に関わる先行研究について整理する。原理日本社では、激しい文体で徹底的な批判を繰り広げた蓑田胸喜の存在感が圧倒的で、原理日本社＝蓑田、というイメージが強かった。二〇〇〇年代に入るまで原理日本社について言及される場合もほとんど蓑田に限定されていた。しかも、その論調や執着度の高さなどから、胸喜の字をもじって「狂気」と呼ばれるなど、まともなものとしては研究されてこなかった向きがある。⁴⁵

早くから戦前昭和のナショナリズムについて研究していた橋川文三は、原理日本社、特にその中心人物の一人である蓑田胸喜について、まともに取り扱われる価値すら疑わしく、なぜ天皇機関説問題で影響力を持ったのかわからないと述べている⁶。橋川の言は、1970年代まではほとんど実証的な研究の対象とされてこなかったことを示しており、そしてその背景には、原理日本社それ自体の問題以外にも、橋川も述べているように、戦前日本の日本主義を語ることが戦後社会では長らくタブー視されてきたことが挙げられる。

ファシズム、超国家主義、ナショナリズムの研究はその後脈が続いていくが、原理日本社を特に扱った研究はその後あまりなされなかった。そのようななかで、片山素秀の論文は原理日本社研究において一点を画すものであったといえる。片山は、天皇を前提とした日本主義思想の一つの極地として原理日本社の思想を捉えなおした。そこでは原理日本社の思想が、「中今」という概念をキーに、現実にはひたすら随順するある意味で究極の現状肯定をする態度として紹介されている。しかし片山の研究は、原理日本社の中心人物である三井甲之の限定された著作にのみ基づいたものであり、かつ思想面に著述が限定されて

⁴ このような態度の著作として代表的なものとして、今回他の注釈などで触れないものに、細川隆元『『日本マッカーシ』始末記』、文芸春秋臨時増刊号、1954、奥野信太郎「学匪・蓑田胸喜の暗躍」『特集文芸春秋』1956.12、宮沢俊義『天皇機関説事件・史料は語る（上下）』、有斐閣、1970、掛川トミ子「『天皇機関説』事件—日本ファシズムの知性への攻撃」橋川文三・松本三之介編『近代日本政治思想史Ⅱ』、有斐閣、1970、小山常実『天皇機関説と国民教育』、アカデミア出版会、1989 などがある。

⁵ それまで原理日本社に関するまともな研究が少なかった、という点に関しては、竹内洋、塩出環という近年原理日本社に注目した著作を著した研究者に共通している。両者とも、原理日本社にレッテル張りをして済ましては日本ファシズムを相対的に捉えきることにはできないと主張している。

⁶ 橋川文三『昭和ナショナリズムの諸相』名古屋大学出版、1994、石橋一哉『文献・蓑田胸喜』横浜胡蝶の会、1992、

いた。⁷瀧川事件、天皇機関説排撃事件、帝大粛清運動などで示された政治的存在感に関する実証的な研究がまだまだ待たれたのである。

同じく一九九二年には、蓑田と同郷の石橋一哉氏が、『文献 蓑田胸喜』を出版する。これは、蓑田に関して触れられた既存の出版物を渉獵して書かれたもので、天皇機関説事件におけるプレゼンスを主に扱い、またそれまでの蓑田＝狂信という捉え方に疑問を投げかけ、蓑田研究を進展させた。⁸

二〇〇〇年代に入ると、原理日本社にまつわる研究が多く登場するようになる。竹内洋を中心とした研究グループは近年、蓑田に着目した研究を行い⁹、『蓑田胸喜全集』を刊行するという重要な成果を残した。ただし、この研究グループは蓑田に注目し過ぎた向きがあり、三井甲之を軽視している感が否めない。この研究グループの中で、植村和秀は別稿でも原理日本社の思想の蓑田を通した解析を試みている。そこで、あるがままの客観的事実としての「日本」を体験することで超越的意思と結びつき、それを表現するには芸術に依る他ない、という思想として蓑田を捉えている。¹⁰

他には、塩出環氏の一連の研究¹¹が挙げられる。塩出氏は、それまで不十分だった原理日本社の政治的プレゼンスを実証的に扱い、蓑田が真の実行犯かのように語られていた瀧川事件においては蓑田のプレゼンスが必ずしも大きくなく、他方であり蓑田が注目されて

⁷片山素秀「『超国家主義』素描」1990、『近代日本研究』慶應義塾福沢研究センター、同上「原理日本社論のために—三井甲之を中心とする覚え書き—」『近代日本研究』慶應義塾福沢研究センター、1992

⁸石橋一哉『文献・蓑田胸喜』横浜胡蝶の会、1992、

⁹竹内洋、佐藤卓巳、植村和秀、井上義和、福間良明編、蓑田胸喜著『蓑田胸喜全集全七巻』、2004、柏書房、竹内洋編、竹内洋、上村和秀、片山杜秀、福間良明、井上義和、石田あゆう、佐藤卓巳著『日本主義的教養の時代—大学批判の古層』、パルマケイア叢書、2006

¹⁰植村和秀『「日本」への問いをめぐる闘争 京都学派と原理日本社』パルマケイア叢書、2007、「蓑田胸喜の西田幾多郎批判—論理的解析（一）」『産大法学』39号、京都産業大学、2006、3「蓑田胸喜の西田幾多郎批判—論理的解析（二・完）」『産大法学』41号、京都産業大学、2007、7

¹¹塩出環「帝大粛清運動と原理日本社」『日本文化論年報』四号、2001、「蓑田胸喜と原理日本社」『国際文化学』第9号、2003、『原理日本社の研究—歌人・三井甲之と蓑田胸喜』博士論文、神戸大学大学院総合人間科学研究科 2003、『天皇「原理主義」思想の研究神戸大学大学院国際文化学研究科須崎研究室、2007、「右翼運動とテロリズムの系譜——自伝・回顧録からみた右翼運動家とテロリズムの源泉」『キリスト教社会問題研究』、2008.2、「河村幹雄の思想と運動」『キリスト教社会問題研究』、2008.12 がある。（他に、筆者未入手のものとして、「三井甲之と原理日本社の大衆組織—「しきしまのみち会」の場合」『古家実三日記研究』五号、2005 がある。）

いなかった河合事件、津田事件におけるプレゼンスの高さを明らかにした。河合、津田事件について具体的には、国会答弁における議員の演説内容の論理がほぼ蓑田の言論を踏襲したものであり、また、関係政治家は原理日本社の誌友として、「帝大肅清同盟会」のメンバーとして、蓑田と共同関係にあったことなどを明らかにした。また、それまでは原理日本社といえば蓑田ばかりが注目されていたが、三井こそが原理日本社の思想面、組織面での基であることを論じた。さらに、原理日本社に寄稿していた同人の研究も行っており、塩出氏の一連の著作は、原理日本社研究を大きく進展させたと言える。

三井甲之に関する研究では、先述の片山氏と塩出氏、そして石井公成氏¹²の成果がある。三者に共通な点は、原理日本社の思想面での淵源を三井甲之に求めている点である。石井氏は、戦前昭和における親鸞の受容のされ方、という射程の中で三井を捉えている。三井は、親鸞の思想を「現実への随順」の思想として解釈している。

日本学生協会についての先行研究はいくつか出ているが、原理日本社に比してもまだ途上であるといえるかもしれない。井上義和は、一九二〇年代には左翼学生こそがエリートであったが、一九三〇年代後半以降は日本主義学生がエリート化したことを、司法局の統計データなどを用いて論証した。また、彼らの思想は、観念右翼の理念型に適合的であったことを示した。具体的には、彼らは天皇の絶対化という「顕教」を、実際には官僚や政治家が国家を動かすという「密教」の場に持ち込もうとしたのである。原理日本社的な言説がエリートに食い込んだことを考えるうえで、示唆的である。しかし井上の論文では、思想の内容面に着目されているが、言説と実践がもった機能についても述べられていない。¹³井上、打越孝明、占部賢志らによる、『日本主義的学生思想運動資料集成』の成果¹⁴が挙げられる。

一章 原理日本社について

本章では、学生協会がその言説の型を負うところの、原理日本社について紹介する。一節で原理日本社の前史をごく簡単に紹介し、二章ではその言説の型の核となる部分を示す。

¹² 石井公成「親鸞を讃仰した超国家主義者たち(一) —原理日本社の三井甲之の思想—」『駒沢短期大学佛教論集第八号』駒沢短期大学, 2002

¹³ 井上義和『日本主義と東京大学—昭和期学生運動の系譜』パルマケイア叢書, 2008.6

¹⁴ 井上、打越孝明、占部賢志『日本主義的学生思想運動資料集成 1』(雑誌篇)全九巻, 柏書房, 2007.1 『日本主義的学生思想運動資料集成 2』(書籍・パンフレット篇)全一〇巻, 柏書房, 2008.2

一節 原理日本社の成立¹⁵

原理日本社は、その源流を、「写生主義」を打出し日本の近代俳句を切り開いた正岡子規に求めることができる。正岡子規の根岸短歌は、『馬酔木』と『アカネ』という二つの機関誌を発行していた。通常の文学史では、正岡子規の正流を『馬酔木』を見なすが、もう一つの流れである『アカネ』の編集を担当していたのが、後に原理日本社の中心となる三井甲之である。『アカネ』内部において、根岸派の中心人物であった伊藤左千夫・斉藤茂吉派が、元来対立していた与謝野鉄幹らの「明星派」に近づくと、元来根岸派を盛んに攻撃していた三井派と伊藤・斉藤派との間で対立が生じるようになる。正岡子規の正統を継いでいると自負していた三井は、伊藤の行動は、子規の流れを継承する根岸派の在り方に悖るものであると考えたのである。この、伊藤・斉藤派と三井派との対立を経て、伊藤・斉藤らの一派は『アカネ』から去ることとなる。その後『アカネ』は休刊を経て、1912年に『人生と表現』と改称し、三井は「人生と表現社」を設立した。その後の原理日本社的言説の基礎となるような、原理主義的日本主義という思想が固まるのが、この『人生と表現』期であった。その『人生と表現』（人生と表現社）を受け継ぐ形で1925年に発刊されたのが、雑誌『原理日本』（原理日本社）である。そして、その編集を任されたのが蓑田胸喜だった。

二節 原理日本社的言説について

本節では、原理日本社が発行する雑誌『原理日本』の責任編集者であった蓑田胸喜、思想的な源流である三井甲之の論説から、原理日本的な言説を概観する。他にも継続的に雑誌『原理日本』に寄稿していた同人として松田福松や木村卯之といった人物もいる。しかし原理日本社同人の言説パターンはほとんど差が無いため、言説の内容を示すにあたっては二人の中心人物に焦点を当てれば十分であると思われる。昭和思想研究者の植村和秀も「原理日本社同人は、互いに見わけがつかない。（……）同人の誰が執筆しても、その分量はともかく、その内容に大差はない」と述べている。¹⁶

先行研究の項で述べたように、原理日本社的な言説は長らく、狂気的なものとして表象されていた。近年にはそれに比べれば、安易なレッテル張りを避ける先行研究が蓄積されているといえる。ここでは、それら先行研究を踏まえながら、従来の研究ではあまり指摘されていない視点も強調して原理日本社的言説を捉える。大まかに結論を言えば、彼らの思想とは原理的な近代への抵抗、拒絶反応として位置づけることができる。同様の指摘は、既にある。例えば植村は、「蓑田たちの学術維新とは、まさに、近代の超克を宣言するものに他らなかつたのであり、蓑田にとっては「近代的思考方法そのものが「危険思想」」

¹⁵ 本節の内容は殆ど塩出（2007）に依っている。

¹⁶ 植村和秀（2007）,p.177

であった、と述べている。しかし、そこにおける近代とはあくまで、原理日本社にとっての近代として扱われている。¹⁷本論では、原理日本社的な言説は、一般性をもつ意味においても、近代に対する抵抗であったことを示す。もう少し具体的には、彼らの思想とは、「日本」という統一の相のもとに世界を捉えなおそうとするものであった。以下、原理日本社の言説をその主要モチーフごとに各項で示す。

一項 「原理日本」という統一

原理日本社の言説では一貫して、「統合」「統一」「総合」「連結」「連絡」といった言葉が頻繁に登場する。これは、彼らの言説すべてに通底するイメージである。「原理日本」という団体・雑誌名からすぐに伺われるように、原理日本社にとって最も重要であり、欠くべからざる「日本」そのものも、このイメージの元に捉えられる。『原理日本』創刊の「宣言」と「綱領」から引用しよう。

「認識主観の帰依しまたそれに没入して撰取せらるべきところのものは、われら日本国民にとって、全開展と総関連とに於ける日本国民生活—即ち『原理日本』である。…『日本』はわれらの人生価値批判の総合的基準—『原理日本』であり、宗教的礼拝の現実的対象—『永久生命』である。そは祖国日本を防護せむとする実行意志であり、『日本は滅びず』と信ずる一向専念の信仰である。¹⁸」

「日本国民の思想的素質とその総合生成的伝統生命の無極開展を、即ち「原理日本」¹⁹「原理日本」とは、まさに読んで字の如く、「原理としての日本」である。そのうちに全てが凝縮され、統一されているような究極原理であるとして位置づけられている。日本とは、「認識主観」が「没入」すべきものであり、「国民生活」の全体が詰め込まれ、同時に「価値」「基準」である。また、「総合生成的伝統生命の無極開展」つまり、肇国以来の生き活きと展開しつづける歴史でもある。ここではまず、日本そのものがこのように統一の相として考えられていることを確認したい。しかし、これだけでははなはだ漠としており、なじんだイメージとしては喚起されないだろう。そこで以下に、原理日本社はその「日本」によって、もう少し具体的には何を統一させようとしたのかを確認する。そのことによって彼らの思想への理解を深めるとともに、そこに現れる問題意識を考えたい。

¹⁷ 同上,p.141-142

¹⁸ 「宣言」『原理日本』,原理日本社,1925.11,p.1 以下、『原理日本』を脚注に示す場合には、出版社を省略する。例えば、「宣言」『原理日本』,原理日本社,1925.11,p.1 は、「宣言」『原理日本』,1925.11,p.1 と表記する。

¹⁹ 「綱領」,同上 p.2

二項 「世界文化単位」としての日本

まず、彼等にとって日本とは、世界中の文化を統一するものであった。

「文化は交通によつて進展し、交通は要素の総合から新要素を創造する。」これが人類文化の開展法則である。日本は過去に於て東洋文化の精髓を摂取しそれを基礎としてさらに明治大正を通じて西洋文化の全体系を細脈に究盡しつつある。われら日本人は今日以降「日本」を分析して「世界」を見出すに至るのである。(……) 私共がここに『世界文化単位としての日本』と申しますのはこの一切の思想、学術、文明の原理を自国の中に見出す事の出来る国は、それは人類文明の発達に余興する一単位²⁰

日本は、伝統的には東洋文化を摂取し、維新後には西洋文化を取り入れ、それを統合した国である。世界の文化を摂取し統合するという意味で、世界文化の発展に資する役割を担った国家であることになる。そして世界中の文化を総合した日本とは、世界のなかに日本があると同時に、日本のなかに世界を見出すことができるような、「世界文化単位」である。単に外来文化を受容するだけでなく、それを日本の内側で総合しているという点に力点が置かれていることに注意して欲しい。この総合は、日本の現在の繁栄とも結び付けられて論じられている。

東洋文明の摂取に当つてもその過程には単なる反訳模倣時代と人物とがあつたけれども、日本人はそれに止らず進んで創造的開展を与へたのであつた。(……) 日本が何処までもそれらの東洋思想に反訳模倣的態度で終始したであらうならば、日本もまた印度支那と同一の運命に陥つてをつた筈である²¹

翻訳模倣とは、受容した分化を統合せずに、そのまま保存するような受容の仕方だ。それは必然的に、個々バラバラに外来文化を保存することを意味する。このような受容の仕方を潔しとせず、日本は外来文化に「創造的開展」を与えた。開展とは、原理日本社的言説において頻繁に登場する術後である。²²時を超え全体が生き生きと流転生成するさまを表している。日本は外来文化をそのまま固定的に受容することをせず、それを自らの生命の律動に従わせ全体として統合し、そのために現在の繁栄があるとされるのである。裏から

²⁰ 蓑田胸喜「高島素之氏の「反訳思想」」,同上 p.31,32

²¹ 蓑田胸喜「高島素之氏の「反訳思想」」『原理日本』1925.11,p.30

²² 元々は仏教用語であるが、片山杜秀(2007)によれば「「開展」といった言葉は、ヴェント心理学に由来する」とのことである。

言えば、引用にあるように外来文化を総合せずに受容することは、国家滅亡にもつながると考えられている。

三項 感得するものとしての「日本」

さて、ここで、先に挙げた引用の一部を再び取り上げる。

人類歴史社会生活の精神文化科学的研究者としての認識主観の帰依しまたそれに没入して摂取せらるべきところのものは、われら日本国民にとって、全開展と総関連とに於ける日本国民生活—即ち『原理日本』である。

特に注意して欲しい箇所は、「認識主観」が「帰依しまたそれに没入」すべきである、と説かれるところだ。「認識主観」は、「原理日本」に没入しなければならないとされるのである。それは何を意味するだろうか。いわゆる19世紀以前の近代的認識は、認識対象である客観からは分離したものとしての主観によってなされる。ところがここでは、それが「没入」している。つまり、ここには対象と距離を取り、主—客という関係においてものごとを認識する近代的認識、ひいては近代的 세계観を否定するような契機が含まれている。それは例えば、以下の引用にも表れている。

『部分』への分析差別は結合総合のための先駆予備作業であり、それは事実の無限無極の『全体』を究盡する目的成就のための手段にはかならぬ(……)。この全体総合本来の目的を遺忘紛失して部分分析、分析のための分析、即ち手段に始終泥着した時、それは(……)『自力のはからひ』『さかしらのことあげ』、観念論の煩瑣唯理主義または訓詁考証学風に墮するのである。²³

「観念」によっていたずらに現象を分析するのは、「自力のはからひ」(現実をありのまま受け止めることなく、現実を対象化して操作しようとする態度)であり「さかしらのことあげ」(理智的に現実を認識しようとする態度)である。また、近代的、理性的、分析的な現実認識の在り方は、全体の生き活きとした生命力を枯渇させる。

概念的の言葉は語義の固定性の故に物質的である。(……)カントを代表者とする所謂理想主義哲学の概念迷信の合理主義、理知主義学風そのものが既に物質主義的であつ

²³ 蓑田胸喜『学術維新原理日本』,原理日本社,1934,p.32,33

た²⁴

この人間の理智の力に対する陶醉はその過信としての『理知迷信』を生んだのである。(……) この迷信は(……) その理知によつて知り得たところの、認識の客體、即ち自然界の物質の性質、それを支配する法則としての機械的因果律を無反省に、認識の主體たる我そのもの、全体としての人間生活そのものに運搬し来り投入して人間生活そのものをも物質的に解き得べしと妄断した²⁵

ここでは概念によって現実を切り取る理知的な態度が、「固定制の故に物質的」として表現されている。物質とは、生命を持たぬものの言いであり、そこには、物質とそうでないものを分かち何か—原理日本社にとってエンティティ、実体ともいうべき何か—が抜け落ちている。固定的で物質的な近代的理性的認識は、「我」、「人間生活」に欠くべからざる、ダイナミズムを持つ実体的なるものを捉えることができないのだ。換言すれば、近代的なまなざしは、本来動的な人及びその生活を固定せしめ、また、そこから実体的なるものをはく奪してしまうのである。それでは、本来動的である最も大切なものとは、何なのだろうか。それは、大正十四年の『原理日本』創刊号に掲載された、蓑田の『原理日本』誌における決意表明ともいえる「新人生主義と學術革命」という論文に表れている。

われらの現実主義派心理学・認識論的見地からは、人間理知の遊離分裂と偏局固陋とを融和統一しまた文化開展せしめ、それらをしてその本来の能作を正しく發揮せしむる人間情意活動の優位を認むるところの主意主義である。またわれらの人生主義は人類史が物的生活要素を総撰統御する精神生活の史的開展として、(……) 人間努力の産物としての文化史なることを認む点に於て、自然科学とは原理論方法論的に対立する精神科学・文化科学的立脚地に立つところの歴史主義である²⁶

理智によっておかしくなってしまった、「本来の動作」を正しく發揮せしめるものがここで、「人間情意活動」として打ち出されている。この情意こそが、理知によって固定的、物質的、バラバラになってしまった人間とその生活を「融和統一」し、生き活きとした全体たらしめるところのものである。別の言い方をすれば、近代理性的認識のまなざしは、

²⁴ 同上,p.24

²⁵ 同上,p.43,44

²⁶ 蓑田胸喜「新人生主義と思想學術革命」『蓑田胸喜全集』1,柏書房,p.264,265 以下、本稿においては『蓑田胸喜全集』の論文を脚注に示す場合は著者名と出版社を略し、『蓑田胸喜全集』は『全集』と表記する。例えば蓑田胸喜「新人生主義と思想學術革命」『蓑田胸喜全集』1,柏書房,p.264,265 であれば、「新人生主義と思想學術革命」『全集』1,p.264,265 とする。

人間とその生活を、最も大切な「情意」から疎外せしめてしまっていたということだ。原理日本社が抱く危機意識はここから発するものであり、執拗な帝国大学法学部、文学部への攻撃も、このもとに理解されるべきであろうと思う。

さて、それでは、理知主義的な認識がいけないとすれば、どのような態度、方法でものを認識、体験すべきなのだろうか。

その確証を芸術的表現に求むる新時代の体験的宗教には到達してをらぬのである。それ故、「日本主義の信念」を生成的完成として成就せられつつあるがままに内的体験に密着して告白表現しようはせずして之を理論的に「確立」しようとするので、それは「さかしらのことあげ」であり「自力のはからひ」である。日本主義は三千年の日本民族生活のうちにわれらの祖先の努力によつて既に確立せられてゐる、伝語の所謂「報身仏」であつて、今新に理論的に「確立」すべきものでもし得べきものでもなく、われはその開展に随順乗托すべきである。無論それは生成的完成であるからその無息の実現はわれら自身とわれらのあらん限りの子孫によつて相続せしめらるべきである。²⁷

「日本主義の信念」＝原理日本は、「理論的」＝理知的に捉えるものではない。そこには日本の歴史、現実、生活が凝縮されているため、理知的に捉えてしまつては、先述したように生き活きとした動的全体を、バラバラ、物的なものとしてしまう。同じ表現を繰返せば、情意から疎外してしまうのである。それは、「内的体験に密着」つまり情意によつて感得するものなのだ。「開展に随順乗托」するとは、生き活きと展開し続ける日本の現実に没入し従うということだ。「情意」から切り離すのでなく、まさに「情意」によつて解するもの。そしてそれを表明するには、「芸術的表現」に依らなければならない。この「芸術的表現」とは、和歌、特に天皇陛下が作成する和歌である御製によつて表すことを意味する。

和歌、御製については、蓑田はそれほど論じておらず、歌人である三井の専門ではある。しかし、蓑田も、以下のように触れている。

我々日本人はかゝる新時代の宗教を、畏くも東西文化を総合統一せる三千年の日本歴史を御大身に具現させられし明治天皇の御製、宗教的信仰さながらの芸術的表現『シキシマノミチ』のうへに見出すのである。²⁸

²⁷ 「諸家の日本主義を評す（二）」『同上』 p.310

²⁸ 蓑田胸喜「マルキシズム対シキシマノミチ」『原理日本』1931.11,p.160

シキシマノミチとは和歌のことであるが、ここでは、特にその代表として明治天皇御製がシキシマノミチとして強調されている。歌人であり、歌論を専門とする三井は、その単著『しきしまのみち原論』のなかで、以下のように論じている。

シキシマノミチは「……」コトノハノミチのウタを中心とする科学的芸術的作業に従事する人々の忠義感情に教化的理想的依拠の中心を求めらるゝのであります。²⁹

シキシマノミチと和歌とは同じ意味に用ゐらるゝのであります。シキシマノミチは日本精神であり、日本人として行くべき道であり、日本国民宗教であり、一切の国民生活指導原理であります（……）シキシマノミチは国語によつて個人生活を公共生活に連絡するもの」³⁰

二人の論説から、御製が、日本人が従うべき原理—原理日本が表現されているものとして位置づけられていることがわかる。「教化的理想的依拠の中心」とは、日本人が教化されるべき中心、日本人の理想の中心の言いである。この御製によって、「個人生活」は「公共生活」つまり全体の生活へと接続される。原理日本が、御製を媒介としてバラバラの個人を結びつけるのである。そのためこのような御製を拝誦するという営みが重要なものとして位置づけられる。御製を拝誦することによって、そこに体現された原理日本を感得し、共感の世界に至ることができるのだ。

原理日本社の思想とは、すなわち、いわば、確実なもの、エンティティとして「日本」を措定し、それを感得することによって、さまざまなものをそのもとに統一する思想であった。

第二章 昭和一桁代後半以降の学生の状況

この章では、昭和一桁代後半以降の学生が置かれていた状況を、当時の社会状況を考慮に入れながら見ていく。そのために、まずその前段階として一節において一九二〇年代から昭和一桁代までの、人格の完成を目指すような所謂「教養主義」文化³¹が変容していった

²⁹ 三井甲之『しきしまのみち原論』,1934.10,はしがき p.5

³⁰ 同上,p.2

³¹ 教養主義に関しては、竹内洋 『学歴貴族の栄光と挫折』 日本の近代 12,中央公論新, 1999.4、『教養主義の没落：変わりゆくエリート学生文化』,中公新書,2003.7、『立身出世主義：近代日本のロマンと欲望』,世界思想社,2005.3、筒井清忠 『日本型「教養」の運命：歴史社会学的考察』岩波書店,1995.5などを参照した。

時代の学生の様相をごく簡単に論じる。それを踏まえて二節において、昭和一桁代後半以降の学生の様相を見る。

一節 大正後半から昭和一桁年代まで

一九二〇年代は、まず、学生の数が大幅に増大した時期であった。

		1910	1915	1920	1925	1930	1935	1940
大学	官	6025	7736	7347	14280	21293	23978	23806
	公			419	1056	1413	873	903
	私			3721	11690	20550	24004	27531
	計	6025	7736	11487	27026	43256	48855	52240
大学予科	官			701	1536	1498	1538	1941
	公			456	1023	950	567	636
	私			6178	11325	20058	17818	22572
	計			7335	13884	22506	19923	25149
高等学校	官	6341	6201	6631	15476	16051	13222	15287
	公				78	1199	1117	1304
	私				238	1001	990	1128
	計	6341	6201	6631	15792	18251	15329	17719
専門学校	官	4260	4442	3656	2738	3426	3566	4460
	公	1662	1876	975	499	1978	2565	3139
	私	18852	23558	17457	3036	54677	57537	82583
	計	24774	29876	22088	6273	60081	63668	90182
実業専門学校	官	6106	7192	7957	17176	19173	19371	32007
	公	443	374	655	1008	568	894	1202
	私	359	841	963	906	1610	5504	8266
	計	31682	38283	31663	25363	81432	89437	131657
高等師範学校	官	1145	1432	1591	2261	2403	2372	2843
	総合計	69967	83528	80795	90599	227929	239584	319790

伊藤彰浩『戦間期日本の高等教育』, 玉川大学出版部, 1999 より

図1に見るように、一九二〇年において約八〇万人だった学生数は、一九三〇年には約2.5倍に増え、約二三〇万人となっている。さらに、一九二〇年代は、日本にマルキシズムが流入し、アカデミズムを席卷した時期であった。学生の間ではモダニズム、「エロ・グロ・ナンセンス」などの文化が流行し、筒井清忠によれば、「読書傾向の「甚だ広範囲でまとまりがない」という状態」が現出する。³²加えて、一九二〇年不況、関東大震災、金融恐慌と昭和恐慌などが続いて発生し、社会矛盾が広く痛烈に意識されるようになる。この不況は特に学生にとっては、空前の就職難として立ち現れることになった。このようないくつもの重なった事情を背景として、昭和五年をピークに、学校騒動が頻発した。

図1 学校騒動の状況

³² 筒井清忠『日本型「教養」の運命：歴史社会学的考察』, 岩波書店, 1995, p.85

	大学			専門学校			高等学校			合計ヨコ
	官	公	私	官	公	私	官	公	私	
1920			1	1						2
21			1	2			1			4
22				1	4		1			6
23	1		2							3
24			2		1	1				4
25	1		3	1		1				6
26	1		2			3	2			8
27	1		3		1	2	2			9
28	1		4			2	3			10
29	1		5				7			13
30	1		6			6	7	1		21
31	2		9	2		4	5			22
32	3		4	3			1			11
33	3		5			3				11
34			2	2		2				6
35			1			1				2
合計タテ	15		50	12	2	29	29	1		138

伊藤 彰浩『戦間期日本の高等教育』, 玉川大学出版部, 1999 より

図2から明らかなように、騒動の発生件数において最も多いのは私立の教育機関である。伊藤は、この学校騒動を、明確な要因に還元することは困難であるとしつつも、その類型化を試みている。

(1)管理主義への反発や自治要求、(2)教育環境や学校経営への不満、(3)管理者・教員層での内紛、(4)学外の政治問題といった事項が、騒動の大半において発端となった直接的要因として指摘できるだろう。そして(1)のタイプが官立校、とりわけ官立高等学校での騒動に多かったのに対し、(2)、(3)のタイプが私立校に多くみられる傾向がある。

筒井と伊藤の指摘から敷衍して述べれば、この時期は、学生数の急激な増大、新たな文化の流入、などによって学生文化の型が動揺し、それを反映するようにして学内の秩序も亦た動揺していた時期であると言える。高等教育機関において一種のアノミー的な状況が現出していた、とも換言しうるだろう。

二節 昭和一桁代後半以降

図1に見るように、昭和一桁代後半以降、西暦で言えば一九三〇年代以降は、学校騒動が落ち着きを見せ、アノミー的な状況が緩和したといえる。しかし、それはただちに「大正教養主義」のような学生のメルクマールとしての文化の型が再び成立したことを意味しなかった。不況による就職難の影響もあり、この時期、大学の職業教育機関化がそれを肯定するにせよ、否定するにせよ、意識されるようになっていた。すなわち、長引く不況と就職難、その反面としての学生数の急増から、大学が就職準備のための機関と化した、とい

う認識が強まっていたのである。加えて、職業教育機関化の別の側面として、大学の営利企業化が意識されるようになる。³³例えば、以下は、昭和七年の『帝国教育』の編集者によるコラムだが、その意識がよく現れている。

我国の専門教育程度以上の学校は(……)中学校及び女学校と比べて学校が約半数、教員数が約半数以下で生徒数は却って多いのであるから、大量生産的である³⁴

我国の私学の多くは社会の教育的必要を満すといふことよりも、むしろ一般の向学心を利用した一種の投資事業である。(……)多くの私立大学においては、名目上の専任教授を置き、大量生産的教育を行つている³⁵

高等教育機関では狭い建物に多くの学生を抱え込む「大量生産的」な教育がなされており、特に私学においてその傾向は顕著で、向学心を利用した「投資事業」として、中身の伴わない「大量生産的教育」をしている、と指摘されている。

このような教育機関の状況は、学生の振る舞いにも当然影響を与えていた。学生は相変わらず左傾化を問題視・危険視され続けていたが、それに加えて、頹廢的、無気力的、功利主義的な学生像が描かれるようになったのである。具体的には、例えば小桧山政秀は、

平常は碌碌講義も聴かない癖にイザ試験となると急に周章狼狽して、というよりは生命でもとられるやうな恐怖の念を以て急に真剣になりだす³⁶

と、テストの直前だけ勉強する、「功利主義的」な学生像を描いている。さらに、当事者である第八高等学校の学生は、以下のような現状認識を取っている。

現在の高校生は無気力である。或ひは又中学生の延長だ。此の言葉を往々耳にする。我々は此れが二種の原因よりと解すべきだと思ふ。其の一つは学校当局の威圧である。我々の自由の要点は漸次狭められんとしてゐる。其の当座はそれについて種々騒ぐであらう。然しそれも軽く退けられて、月日の減るに従つて受動的な生活へと入つて行くのである。今一つは社会の状勢である。即ち大学の入学難、もしくは就職難なるものが吾々に迫り、自然利己的な、又自己を隠すが如き非儀卑劣な人物となつて、絶えず小心異々としている。³⁷

³³ 伊藤,前掲書,p.166-177

³⁴ 「教育思潮 高等教育半減論」『帝国教育』,帝國教育界,1932.6,p.34

³⁵ 同上,p.36

³⁶ 小桧山政秀「今昔大学談義」『帝国教育』,帝國教育界,1935.6,p.3

³⁷ 新見重夫「(10) 高等学校と学寮と自由の生活(第八高等学校・昭和十一年)」『旧

無気力、従順、利己的、な退廃的なものとして、当時の学生・学校の様子が述べられているの分かるだろう。最後に、数少ない戦前の学生に関する研究書を著した唐沢富太郎の著作から引用する。

学生の思想問題に対する弾圧は、致命的な打撃を与え、高等学校においては、『高校生の中学化』という現象をひきおこした。一般に中等教育においては、学生を思想から閉め出し、個性を殺した従順なタイプの生徒に教育するのであるが、高校生もこれと一体の如くに化したのであり、ここに社会に遊離し、無気力な、しかも功利的な高校生へと変ぜしめた。(……)かくて昭和五、六年を境として、高校生の風紀は弛緩し、服装上には奇異を生じ、構内の規律はこれを無視するなど、頹廢の空気が濃厚となつた(『第四高等学校時習寮史』一一一頁参照)。(……)このようにして、思想弾圧の後に残つたものは、「歪められた伝統、沈滞せる校風、懐疑と虚無、享樂と頹廢の空洞であつて、それが即ち残骸化した、末期自由主義の姿でもあつたのである。(……)」(同上一二〇頁)と云われるが如きものであつた。³⁸

また、伊藤彰浩によれば、この時期には消費生活を充実させ、他面では能率的に点数を取ろうとする「中層階級的学生」という類型が登場し、それが多数派として意識されていたという。³⁹小椋山政秀が描いた学生も、八高生である新見の現状認識も、さらに唐沢の記述も、そうした「中層階級的学生」として捉えることができるだろう。つまり、それまでの限られたエリートとしての学生では無く、天野郁夫が言うように大衆としての学生がここに成立したといえよう。⁴⁰そして図1に見るように、それはこれまで見てきたように質的な意味に加え、図1に見るように学生数が220万人を超えるという量的な意味においても言えたのである。

大正教養主義という学生文化が動揺し、頹廢的で利己的な「中産階級的学生」が耳目を引くようになったこの時期には、他方で、河合栄次郎による『学生生活叢書』シリーズがベストセラーになるなど、必読書や就職、学生生活に関する、いわばマニュアル本が多数出版されていた。そういった学生用のマニュアル本は、筒井清忠によれば、明治三〇年代の上京ブーム時に流行してからは鳴りをひそめていたという。⁴¹以下は史料検討を欠いているため憶測に過ぎないが、これは、学生たちが再び自らの文化を求めていた、と考えられるのではないだろうか。

制高等学校全書』6,旧制高等学校資料保存会刊行部,1985,p.257

³⁸ 唐沢富太郎『学生の歴史』創文社,1955,p.262,263

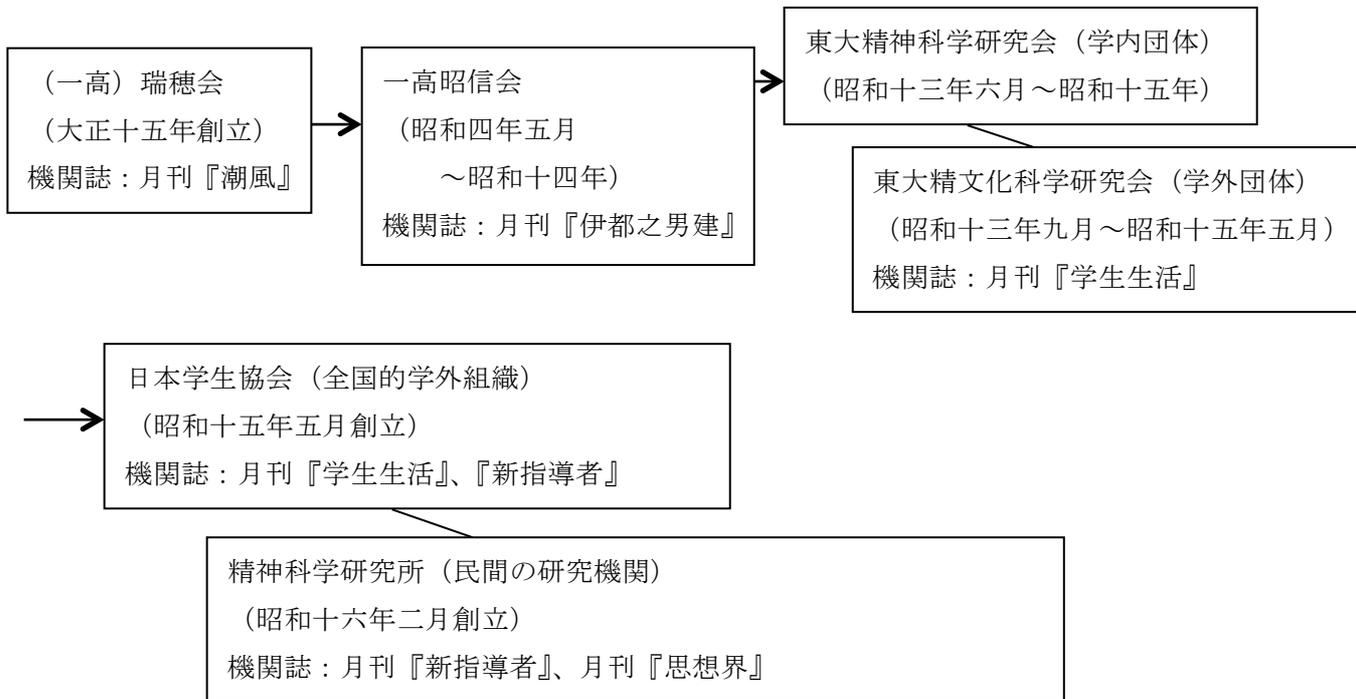
³⁹伊藤彰浩『戦間期日本の高等教育』玉川大学出版部,1999,p.172

⁴⁰天野郁夫『高等教育の時代 下-大衆化大学の現像』中公叢書,2013,p.182

⁴¹ 筒井,前掲書,p.85,86

三章 学生協会の展開過程⁴²

まず、簡単に学生協会の変遷を以下に図で示す。



このように、第一高等学校の団体としてスタートした学生協会は、拡大を続け最終的に全国的な学生団体となった。後に紹介するが、はじめに拡大過程を簡略に述べれば、中心メンバーの一人である小田村寅二郎が最終的に停学処分となる昭和十三年九月の「小田村事件」を契機として、昭和十四年から本格的に全国に運動を拡大し、昭和十五年七月の四〇〇名を動員した「菅平合宿」頃には、会員数が四〇〇〇人程となり、昭和十八年に弾圧されるまで、戦時期の学生運動としては最大級のものに成長したのである。⁴³

⁴² 学生協会の歴史全体については、小田村寅二郎『昭和史に刻むわれらが道統』日本教文社著,1978、井上,前掲書などに詳しい

⁴³ ここまで了解して頂ければ、これ以降の学生協会の歴史は読み飛ばして頂いても、後の章との接続にあたってはさしあたり十分である。

一節 瑞穂会と昭信会⁴⁴

さて、そのような学生協会の会としての源流は、沼波瓊音という人物が中心となって大正十五年に発足した瑞穂会にある。瑞穂会は、社会主義的風潮の瀰漫に対する危機意識を背景として創られた、国史、日本文化のいわば学術サークルである。そして、昭和三年五月、この瑞穂会において在野の聖徳太子研究者、黒上正一郎が行った聖徳太子についての連続講義に感銘を受けた学生四人が昭和四年五月に結成したのが、一高昭信会だった。会の活動としては、毎朝の明治天皇御製拝誦と、週一回の例会があった。しかし、指導者である黒上正一郎は昭和四年の十二月には病に冒され帰郷し、約一年半後の昭和五年九月に逝去してしまい、昭信会は早くもその先導者を失うこととなる。さらに、その後昭和七年までの間に、四人の初期メンバー中二人が亡くなるという不幸が続く。黒上亡き後の昭信会の指導者となったのが、三井甲之であった。黒上が三井に師事していたことから、三井と昭信会の結びつきが生まれ、昭信会も三井を師と仰ぎ、三井もまた昭信会を積極的に支援することとなったのである。

一高昭信会は、昭和七年二月から『伊都之男建』（読み方は「いつのおたけび」もしくは「いづのおたけび」）という機関誌を発刊し、言論活動も行っていた。『伊都之男建』上では、御製研究、しきしまのみち（和歌の作成）、その他時局に関する論説の展開などがされた。

二節 東大精神科学研究会、東大文化科学研究会の発足と小田村事件（昭和十三年を中心）

昭和十三年、後に学生協会幹部、精神科学研究所の所員の中心となる、昭和八年までに一高に入学した昭信会会員らがこの年に全員東京帝大に入学した。それに伴い、昭和十三年六月に東京帝大の学内団体として東大生精神科学研究会（以下、東精研）が発足する。そしてこの年の九月に、所謂小田村事件が起こる。概要をかいつまんで説明すれば、『いのち』という国粋主義的雑誌に、東精研の小田村寅二郎という学生が東京帝大教授陣を批判する論文を発表したことが学内で問題となり、小田村は外部と通牒して教授を貶めたと

⁴⁴ 瑞穂会については、打越孝明「第二章 第一高等学校みずほ会の誕生と昭信会の派生—日本学生協会の思想的源流（その一）—」『日本主義的学生思想運動資料集成 1』（雑誌篇）第一巻、柏書房、2007、p.83-116 に大部分を依った。以下、本稿において脚注で『日本主義的学生思想運動資料集成』を示す際には、例えば打越孝明「第二章 第一高等学校みずほ会の誕生と昭信会の派生—日本学生協会の思想的源流（その一）—」『日本主義的学生思想運動資料集成 1』（雑誌篇）第一巻、柏書房、2007、p.83-116 であれば、打越孝明「第二章 第一高等学校みずほ会の誕生と昭信会の派生—日本学生協会の思想的源流（その一）—」『集成 1』1、p.83-113 と略記する。

の咎で無期停学処分となったのである。そのことの背景には、原理日本社が関わる帝大肅清運動によるバッシングが激しさを増していたことがあった。小田村の行動はこの原理日本社グループの指示に従ったものと考えられたのである。しかし実際には、そのような事実は確認できず、冤罪であると考えられる。⁴⁵

このような状況のなかで、東精研は機関誌の発行を試みる。しかし、東精研の部長となっていた経済学部教授土方成美は、そのことに難色を示した。当時東京帝大経済学部内部では、戦争に積極的に協力すべしとする所謂「革新派」の教授と、河合栄次郎などを中心とするそれに反対する教授陣との間で対立が生起していたのである。⁴⁶土方は「革新派」の中心人物であり、小田村問題もくすぶり続けているなか、膝元の東精研において雑誌が発刊されると、土方は責任と問われかねずその立場が危うくなると考えたのだ。そこで、学内団体の東精研とは別に、雑誌発行のための学外団体として東大文化科学研究会（以下、東文研）が昭和十三年九月に設立され、そこから機関誌『学生生活』が発行された。ちなみに、発行場所は昭信会OBである加納裕吾の自宅であった。

この『学生生活』創刊号は十月に出版されたが、先に述べた小田村寅二郎の無期停学処分が決定されたのはその直後であった。この処分を機に、東精研は大学当局の不当処分を批判するキャンペーンを展開する。そして、この時期から東精研は全国的な学生運動への道を歩み始める。『学生生活』一二月号の「高校・大学通信」には、新潟高校に新たに設立された姉妹団体の信和会と九州大学の学生による論説が掲載された。⁴⁷その一二月に、小田村寅二郎は九州へと旅立ち同志、教員との知遇を広げた。⁴⁸

三節 正大寮設立、運動の全国展開（昭和十四年を中心）

年が改まった昭和十四年一月、本郷に「正大寮」開寮した。ちなみに「正大寮」という名前は、水戸学の藤田東湖の漢詩における一節「天地正大の気、粹然として神州に鍾まる」から取っている。八部屋の借家で、毎朝明治天皇御製拝誦を行い、「同信生活」を営んでいた。⁴⁹

⁴⁵ この経緯に関しては井上,二章,三章,前掲書,占部賢志「東京帝国大学における学生思想問題と学内管理に関する研究」『九州大学大学院教育学コース院生論文集』,2004、同上「第四章 東京帝国大学「精神科学研究会」の結成とその消息—いわゆる小田村事件の顛末を中心に—」『集成1』1,p.117-147

⁴⁶ 「平賀肅学」に関しては、竹内洋『大学という病：東大紛擾と教授群像』中公叢書,2001.10を三章した。

⁴⁷ 『学生生活』,東大文化科学研究会,1939.12,p.57-52,『資料集成1』2,p.370-375

⁴⁸ 小田村,前掲書,p.88,89

⁴⁹ 同上,p.87

昭和十四年六月には、東精研の会員七名を東日本班と西日本班の二班に分けて全国遊説へと送り出し、全国の大学、高専学生と親睦を深めた。東日本班は六月一日からの十六日間で、仙台二高、東北大、弘前高、山形高、新潟高、新潟医大、富山高、金沢四高、名古屋八高、静岡高の計十一校の学生たちと座談会や食事会などを催した。西日本班は同じ日からの二十二日間で、浪速高、和歌山高商（校長のみ）、高知高、松山高、大分高商、鹿児島七高、熊本五高、九州医専、佐賀高、福岡高、九大、山口高、松江高、岡山六高、姫路高、大阪高、大阪商大の計十七校と交流した。東西合わせれば、合計二十八校である。⁵⁰

同年七月には神奈川の無量光寺でこの後毎年恒例になる全国合同夏合宿の第一回が実施された。「全国学生夏季合同訓練」と題され、二十六校から「百五十名には少しく充たない」学生たちが馳せ参じた。⁵¹その直後には、「全日本学生地方別連合訓練合宿」と題して、東北、関東、近畿、中国、四国、九州南部、九州北部七つの地域ごとに班を編成し、八月末から九月始めにかけての一週間、七地域で同時に合宿を行った。⁵²この地方別合宿が開催された八月の『学生生活』上には、「我らは此の度一千名を突破するに至った全国学生同志の…」とあり、昭和十四年の中ごろには会員数が約一千名となっていたようである。⁵³さらに同年の十一月には、「明治節都下学生合同合宿」を敢行し、十七校から学生が結集した。⁵⁴年が明けた翌年、昭和十五年二月には学校別合宿が行われ、各地の学校がそれぞれで合宿を実施した。

四節 日本学生協会と精神科学研究所設立（昭和十五年、十六年）

そしてこの後には、「日本学生協会」が成立する。昭和十五年五月十三日に開催されたその創設式典には、近衛文麿など、著名な人士が何人も出席した。ここにおいて、東大文化科学研究会は発展的に解消され、機関誌の発行と正大寮の運営は日本学生協会が担うこととなったのである。⁵⁵日本学生協会後も、運動はますます盛んに継続される。五月二十五日には「日本学生協会成立記念全国巡訪」として、第二回の全国遊説が行われた。今回の巡訪はより大規模なものとなり、三、四名から成る班を四班編成して全国に派遣して、約二十日間で四十三の大学、高校、専門学校を訪問した。六月十五日には、「日本学生協会結成記念大講演会」が催され、二千人を超える聴衆を集めた。同月二十五日には、この集

⁵⁰ 「全国学生歴訪同信世界展開記」『学生生活』,東大文化科学研究会,1939.8,p.7-18『集成1』 1,p.74-85,小田村,前掲書,p.89,90

⁵¹ 「全国学生夏季合同訓練記録」,同上,1939.9,p.7,『集成1』 2,p.119

⁵² 「全日本学生思想訓練合宿記（地方別）」,同上,1939,10,p.45-58『集成1』 2,p.205-218

⁵³ 「全国学生歴訪同信世界展開記」,同上,1939.8,p.7,『集成1』 2,p.73

⁵⁴ 「明治節都下学生合同合宿」,同上,1939,12,p.44-47,『集成1』 2,p.356-359

⁵⁵ 「編集後記」『学生生活』日本学生協会,1940.6,p.52 小田村,前掲書,p.111-112

会に出席しその後、感想の手紙や葉書を学生協会に送った学生のなかから百五十名が選ばれ、青山会館において懇談会が開かれた。⁵⁶

七月には、全国から学生を集めて第二回の合同夏合宿が実施された。「菅平合同合宿」と題されたこの合宿は、七月十六日から始まり一〇日間という長期に及ぶもので、三〇〇名という当初予定を大きく上回り、八十四校から約四〇〇名を動員した。前年の無量光寺における合同合宿の参加者は一三〇名であったため、実に三倍以上の増加である。⁵⁷この合宿の様子は動画撮影され、『文化の戦士』と題する記録映画にまとめられた。このようにして、昭和十三年十月の『学生生活』発刊から二年足らずのうちに、運動は本格的に全国的なものとなった。全国の大学・高等学校・専門学校と連携し、実際に動員力を持つ一大学生運動にまで発展したのである。

このように順調に拡大・発展を続けた日本学生協会であったが、昭和十五年七月の第二次近衛内閣成立から、しだいに当局、特に文部省との軋轢を深めていくことになる。第二次近衛内閣の前から始まっていた新体制運動の一貫として、文部省による学校新体制⁵⁸が進められ、校内団体がすべて解消され、学校ごとに一元化されようとしていたのである。これは必然的に東大精神科学研究会の解消を意味していたため、学生協会はこの施策に強く反発することとなる。東京帝国大学は、昭和十五年十月から全学会という一元的な学校組織のもとに学内団体を再編成する動きを開始した。この過程で、無期停学とされていた小田村寅二郎は退学処分となり、昭和十六年の三月には東大精神科学研究会を学内団体として認めない方針を取った。こうして、東精研は解散することになった。そしてこれと呼応するように、昭和十六年の始めには、小田村以外に、佐賀高等学校、佐賀高等学校、水戸高等学校、新潟医大、松江高等学校、山口高等商業、福島高等商業、そしてさらに東京帝大など各地の学校で日本学生協会系の学生が、始末書、停学、退学処分の対象となり、特に水戸高校の学生処分問題は国会の委員会でも取り上げられた。⁵⁹小田村寅二郎は当時を振り返り、昭和十六年の夏頃の時期には「中には、学生たちが校庭に出て”明治天皇の御製を拝誦”してゐることに対してすら、”やめてほしい”言ひ出す生徒主事が出て来る有様であつた」と述べている。⁶⁰このように、学生協会は学校当局や文部省と対立を深めていった。しかし、それにも拘らず（もしかするとそれゆえに）、日本学生協会はその勢いを拡張し続けていく。昭和十六年十二月末の時点では、東京三五〇〇＋近畿支部五〇〇＋新潟

⁵⁶ 「日本学生協会懇話会成立す」,同上,1940.7,p.14,『集成 1』 3,p.150,小田村,前掲書,p.123,134

⁵⁷ 「菅平合同合宿報告」『学生生活』日本学生協会,1940.9,p.40-p.52『集成 1』 3,p.286-298

⁵⁸ 特に東京大学「新体制」については、宮崎ふみ子「東京帝国大学『新体制』に関する一考察—全学界を中心として—」『東京大学史紀要』 1,1978.2,p.63-100を参照した。

⁵⁹ 「学生運動の問題（未発表議会速記録）『新指導者』 1941.4,p.58,59,『集成 1』 4,p.66,67

⁶⁰ 小田村,前掲書,p.187

支部五五+東北支部三〇+中国史部三三の合計で四一一人が学生協会の「同志」となっていた。⁶¹当時の高等教育を受けていた学生の1%以上が学生協会に所属していたという計算になる。

やや時期が前後するが、学生協会と体制との関係が悪化していたこの時期、「精神科学研究会（以下、精研）」が設立された。昭和十六年二月十一日の紀元節に設立されたこの団体は、大学を卒業し社会人となっていた学生協会の幹部を中心として構成された民間の研究機関である。ここに、学生運動を日本学生協会が担い、国民大衆に向けた社会運動派この精神科学研究会が担う、という二元体制が成立した。そしてこれに伴うように、昭和十六年四月号から学生協会の機関誌『学生生活』もその表題を『新指導者』に改めて発行されるようになる。⁶²

先述の様に日本学生協会は文部省や学校と対立するようになっていったが、それは、毎年行われている夏の全国合同合宿に対する干渉にも現れている。昭和十六年の夏合宿は七月十八日から比叡山において行われる予定で、大政翼賛会の後援を得、文部省の正式認可も得ていた。開催の二週間前から募集を開始したにも関わらず、五〇〇人の定員をはるかに上回る約七五〇名の参加希望者が殺到した。しかしこの合宿が、開催直前で政府から中止の指示を受けてしまったのである。そして、合宿の五日前に急きょ全ての計画を変更し、都下の学生のみ御嶽山で合宿を行うことになる。しかし、約一二〇名の学生が中止を知らずに比叡山に集まってしまう、結果として、御嶽山二三〇名と比叡山一二〇名で東西二か所合宿を同時実施することになった。小田村寅二郎は後に、「「学生協会」の威力を警戒し、やがて弾圧への姿勢がすでに擡頭しつつあつたと見るほかはなからう。」とこの中止について述べている。⁶³

さて、このように政府からの圧力をしだいに強めつつあつた学生協会であるが、それでは彼らはこの時期、どのような形で政府当局を批判していたのだろうか。まず目立つのが、戦争遂行の方策に関する批判である。すなはち、戦争は短期であるべきものとして、戦争の長期化を批判していったのである。そして第二に、統制経済や新体制運動についての批判だ。統制経済や新体制運動については、それがマルキシズム的であるとして筆誅を加えていった。特に、両者をともに押し進めている存在として、昭和十六年の始めには東亜連盟を批判の対象として論難を加えている。⁶⁴こういった批判の勢いは、東条内閣が成立し、昭和十六年十二月八日に太平洋戦争が勃発してからも衰えることは無かった。そしてその結果、昭和十八年の二月十四日、東京憲兵隊によって精研メンバーの一斉摘発が行われ、ここにこの学生運動は壊滅状態となった。

⁶¹ 内務省警保局『昭和十六年中に於ける社会運動の状況』p.509,510

⁶² 小田村,前掲書,p.192

⁶³ 小田村,前掲書,p.186

⁶⁴ 『支那事変解決を阻害するもの』精神科学研究所,1941.2,など

四章 学生協会の言説

本章では、学生協会が生産する言説の型が、原理日本社におけるものと相同であることを示す。学生協会の言説の基本的な範型は原理日本社にあり、学生協会の言説はほとんど、その範型を題材に即して適応することによって生産されているのである。まず第一節では、運動に動員した側の言説を取り上げる。具体的には、第一高等学校昭信会時代から中心的地位におり、学生協会の理事・幹事や精神科学研究所の所員などの役職に就いている小田村寅二郎（昭一一第一高等学校卒、昭和一二年度『伊都之男建』責任編集）、上野唯雄（昭九卒、昭八『男建』編集）、桑原暁一（昭八卒、昭八『男建』編集）、高木尚一（昭七卒、昭八『男建』編集）、田所広泰（昭六卒、昭信会設立者）、そして、東文研の指導層が書いていると考えられる『学生生活叢書』である。続いて第二節で、学生協会の運動が全国展開してから運動にかかわり、『学生生活』や『新指導者』への寄稿もほとんど見られない、いわば動員された側の学生たちの言説を取り上げる。

一節 指導層の言説

この節の目的は、原理日本社の言説のモチーフを範型として学生協会的言説が継承していることを示すことである。そのため、引用文に関しての補足説明、解説などはごく簡単なものとどめる。

以下の引用は、それぞれ『男建』上の小田村寅二郎の筆によるものと、『学生生活叢書』シリーズの一冊目である『新学生生活論』からのものである。

祖国日本が永遠の発展を約束され我が日本文化が無窮に開展すべき運命を背負つてゐるのも、古来国民各自がその個人的生命の個体的功業に固執せず、国礎そのものである所の全体的永久生命に個我を没入せしめ、承諾必謹の唯一臣道実践に邁進して来たが為である。我が日本を永遠に支へてゆくものは全国民の国民的情意である。⁶⁵

国民が一つ心にむすび合ひ祖先の祖国守護の情意生活をこの現世に受けつぎゆかんとする所に第一の志を置く者は、その全体生活、国家生命に帰入し没入する所に、自己の

⁶⁵ 小田村寅二郎『伊都之男建』第一高等学校昭信会,1934.4,p.30

修養の意義を見出すのであるから、人生原理としては国体の信への帰入、同信同胞生活への没入をこそ考へざるを得ないのである。⁶⁶

統一原理である日本への没入、帰入、それによる国民のあるべき生活への統合というモチーフが現れている。

次の引用は『学生生活』の同じ巻号に掲載された、それぞれ桑原暁一と田所広泰による論説で、世界の文化をも統合する「世界文化単位」としての日本という言説が継承されている。さらに、下段の田所による論説には、御製こそが「日本」の根本にある旨が説かれている。

「日本世界の観念」によつて世界を捉へなければならぬやうに、歴史的にも日本世界史の観点からでなければ真に「日本」を知ることにはならぬ。この意味に於いて日本精神史とは日本世界精神史といふことに外ならぬので、三井甲之氏はこのことを、日本は既に確立せられたる世界文化単位であると云はれた。⁶⁷

わが皇室に伝へられた『しきしまのみち』の汚れざる伝統を見逃し奉つてはならない。(……) これ[しきしまのみち:引用者注]こそは、日本思想史を内に支へる威力である。これあるがために、日本思想史は外国の凡ゆる思想文化に対して厳正の批判を下し得たばかりでなく、それらを余すことなく摂取する基準を得たのである。⁶⁸

さらに、感得、体験を重視し、理知的、概念分析的認識方法を排除する認識論と、芸術表現の提唱は、以下の上野唯雄の言説によってそのまま用いられている。

精神科学的研究の対象は実人生そのものであるからして、その研究方法も亦これに従つて規定せられるのである。科学的研究の生命たる論理的正確さは人生事実に随順せる心理的開展そのものにもとづく可く、かくしてこゝに人生の事実がありのまゝに開折せられるのである。(……) 人生の出来事についての理知的分析は(……) 因果の論理が機械的自然的に作用する如くに妄想する。その心的動機は人生の統一を分裂破壊せしむるところの者に支配された卑劣感情である。(……) 人間心理は不可測の

⁶⁶ 『新学生生活論 一学生生活叢書第一輯一』東大文化科学研究会,1939,12,p.25

⁶⁷ 桑原暁一「日本精神は総合的純一精神である」『学生生活』東大文化科学研究会,1939.5,p.9,『集成1』1,p.499

⁶⁸ 田所広泰「日本思想史と『しきしまのみち』」,同上,p.35,『集成1』1,p.525

進展を示すのあるから理智的に分析して固定化することは出来ない。この深奥の内心を道破してありのままに表現するのは言葉—その詩的表現である。⁶⁹

そして最後に、以下の桑原尚一の文からの引用に、「日本人」という共感に至る媒介としての御製の位置づけを確認しよう。

たとへば 明治天皇御製を拝誦しまつゝて心から感動し、ありがたしと痛感すれば、それが即ち『日本人』たることの紛れもなき論証といはずも実証なのである。⁷⁰

ここまでの引用で、国民・文化を統一する原理としての日本、理智的概念的認識の排除、感得・随順するものとしての日本、日本が凝縮的に表現されるものとしての御製、など、原理日本社の言説の核となる部分が学生協会の言説に継承され、言説の模倣的再生産が行われていることが分かるだろう。

二節 動員された側の言説

一節では、動員する側が原理日本社的な言説を引き継ぎ、模倣的に再生産していることを示した。二節では、この言説の型が、中心的な指導層だけでなく、『学生生活』や『新指導者』などの機関誌に名前もほとんど見いだせないような追随者においても、原理日本社的な言説は共有され、言説の再生産が行われている様子を示す。

これから引用するのは、松尾陽吉という学生による通信（便り）である。『学生生活』の四・五月合併号の「全国に澎湃として起れる積極的建設譜」と題された、各地の学生からの通信集コーナーに掲載された。松尾は、この通信が掲載される以前には一度も『学生生活』上に自らの論説を寄せたことは無い。松江高等学校同信会が合宿した際に会員八名が作成した和歌がそれぞれ数首ずつ『学生生活』昭和一五年三月号に掲載されたが、その和歌作成者のうちの一人として名前が見えるのが、唯一である。⁷¹しかも、同信会は、昭和十四年八月の全国合同夏合宿には参加していない。『学生生活』上で確認できる限りでは、昭和十四年六月における全国巡訪で東文研が訪問したのみの関わりである。このような、運動の傍流に位置する一学生が、原理日本社的な言説の再生産に参画しているのだ。やや長くなるが、以下引用である。

⁶⁹ 上野唯雄「世界観の基礎」,同上,1939.2,p.23,24,『集成1』1,p.393

⁷⁰ 高木尚一「高等学校在学の諸兄に寄す」,同上,1938.11,p.29,『集成1』,p.266

⁷¹ 「山口高商斯道会合宿詠草」,同上,1939.11,p.22,『集成1』2,p.278

松高同信会が結成されたのは昨年の六月であつたが、会員が総て一年生であつた故に思想的団体としては極く貧弱なものであつた。(……) 英雄主義的道義心による立身出世は新入生に実に徹底的に浸潤してゐる。又忠の觀念が常識的、抽象的に考へられてゐる。何のために高校へ入るかと聞けば、個人人格を完成せんが為であると言ひ、社会に出て立派な地位を得んがためであると言ふ人が多いのである。しかし、国体随順の信は、之を他に信ぜしむることが出来るが故に、決して失望しはしない。唯願はくは、所謂覚醒者の不寛容に陥らぬことである。全体没入の世界にあつてこそ、自由に個性、能力を伸長せしむることが出来ると思ふ。我等は、祖国が今や未曾有の危機に直面してゐることを知つてゐるが故に、臣道感盡滅の危機は身にひしひしと感ぜられるが故に、恰もまつろはぬ醜を打ちあらふが如く不斷の戦を続けて行かねばならないのである。分裂意志には実行が無い、聖戦遂行意志は祖国随順の信に帰一せしめられてこそ、その威力を發揮する。我等は、不可測なる実人生にあつて永遠への思ひを燃し、狭小なる自己を常に全体生命に触れさせつゝ、かなしき時には歌をうたひ全国の同志の身を思ひ、迷ひたる時は御製を拝誦し奉つて、我等の信が全日本に実現されるべきの日を夢みつゝ、名もなき民草の一人として戦つて行かんとするものである。[下線;引用者]⁷²

下線部が、原理日本社的一学生協会的言説にはほぼそのまま見られる表現となっている。特に、「随順」的な表現は何度も使用されている。このように、運動において全く周辺的であるような団体においても、原理日本社的言説の型は撰取されている一言い換えれば、言説の型が伝染している。

次に示すのは、運動に参加しながらも志なかばで命を落した学生の日記であり、遺稿として出版されたものである。

九時半—十時頃から「東亜皇化圏論序説」を輪読、山桜集を読む。将士の胸底ゆ湧き出づる言の葉にこもる誠の高き調べ実人生密着の国民的感激に深き感動を覚えたのであつた。

自由討論に我等は真の同信協力の合成威力の体験を深く味ひ楽しき心境に到することが出来た。

我等は、大君への随順、臣道実践しきしまの道にのみ宗教を見出すものだ。概念で規定するものに非ず。⁷³

「実人生密着」「随順」という語彙は原理日本社一学生協会的言説に特有のものであり、「同信協力の合成威力」「概念で規定するものに非ず」という考え方もまたそうである。さ

⁷² 松尾陽吉「我等の決意を表明す」,同上,1939.5,p.26,『集成 1』1,p.516

⁷³ 『百武尚美遺稿』同信会正大寮,1942.9,『集成 2』6,p.179-201

らに、「深き感動」「体験を深く味ひ楽しき心境に到する」といった、「同信生活」の歎びが強調されている。これは後に見るように、原理日本社の言説の型としてはそれほど見られないが、特に学生協会が盛んに強調したことであった。

ただし、本節でここまでで紹介した二つの引用は、出版されたものであるため、学生協会に適合的なものに編集されている可能性も排除できない。そこで次に載せるのは、早稲田大学政治経済学部に所属していた学生の個人的な手記である。これは出征にあたって、家族に遺すために自分史を振り返り過去の日記を再構成してまとめたものである。つまり、全く個人的な手記であるため、学生協会によって引用された可能性が無いものである。学生協会の運動がどのようなものとして当事者である学生に表象されていたかを示す貴重な資料であるといえよう。

伝統を誇る早大政経学会に於ける内田教授の講義は、最初は希待を持って聴講する事に努めたのであるが、余には机上【p. 68】の論としての観念的な理論にはどうしても興味を持つ事が出来なかった。(……) 現代日本の危機を齎したものが、各方面の無連絡分科の上に立脚した自由主義、個性主義であったやうに、学校教育の欠陥もまたその個人主義教育思想とそれに立脚した個人主義的制度である。⁷⁴

これもまた後に見るが、まさに、学生協会そのままの現状認識である。現実から離れた講義に対する強い不満が持たれ、個人主義に代表されるさまざまな分裂によって「現代日本の危機」が起きていると認識されているのである。加えて注目すべきは、単に現状に対する認識が似通っているだけでなく、全く同じ語彙、言い回しを使用していることだ。上の引用であれば例えば「無連絡分科」「固体主義」といった表現がある。他にも、「体験のみに依つて、人生問題は解決される。」⁷⁵「学校教育其の俛なる生活に随順し行くに過ぎなかったのである。」⁷⁶という、独特の言い回し、表現が取られている。このように、個人的な手記においても原理日本社—学生協会的言説の模倣・再生産—伝染を確認することが出来た。

ある文体を身につけようとする態度は、畢竟、その文体を模範として、あるべき形として了解していたことを意味する。そのあるべき形に従って文章を生産する行為は、自らの身体をある特定の型に流し込む営みである。三章で、学生協会の運動が盛んになっていた時期は、既存の学生文化が動揺し、頹廢的な空気が問題視されていたことを示した。原理

⁷⁴ 柳田利夫菅野武雄『『最後の手記』(二) —日本で『日本人』になった日系二世の生活と思想—』『史学』, 2013.9, p138-140

⁷⁵ 柳田利夫「菅野武雄「最後の手記(一) —日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想—」『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 6』2011, p.93

⁷⁶ 同上, p.92

日本社一学生協会的な言説の型の模倣という行為は、動揺した既存文化に代替する新たな文化の型を纏うという機能を果たしていたと言えるのである。

五章 身体的で実践的な学生のための運動

学生協会の運動は日本主義的な思想運動である。しかしその一方で、彼等の運動は多分に身体的で実践的な学生のための運動であった。本章では、この後者の側面に特に注目して彼らの運動を捉え、運動がどのようなものとして打ち出され、そしてどのようなものとして受容されたのかについて考える。第一節では、第一高等学校昭信会の機関誌『伊都之男建』上における学生・学校の現状の認識のされ方と、同信生活についての言説を確認する。そして第二節でそれぞれが『学生生活』『新指導者』においてはどうだったのかを見る。三節では、昭和十四年夏の全国学生合同合宿と昭和十五年六月の講演会、それぞれの参加者からの便りから、学生協会の運動がどのようなものとして参加者に表象されていたのかを探る。最後に第四節において、本章の内容をまとめる。

一節 『伊都之男建』

この節では東文研が設立される昭和十三年九月よりも前、一高昭信会の『伊都之男建』の論説をいくつか見ていく。『伊都之男建』は昭和七年から昭和十六年まで発刊されていたが、ここで取り上げるのは、昭和十三年八月以前の巻号である。

さて、まず、同信生活とは何か、ということを確認しておこう。簡単に言えば、同信生活とは、「日本」を信仰する「同信の友」らによる相互の精神的交流と、それに基づく協力・生活のことである。『伊都之男建』よりも時期は下るが、非常に簡潔に同信生活について記されているので、学生生活叢書シリーズの一発目である『新学生生活論』から参考のために引用しよう。

同信生活とは信を同じうするものらのゆるぎなき協力生活を云ふ。信とは通俗的には信仰と云ひ信念といつても差支へないが、要するに広遠なる日本国体の精華に対する信である。それは他項に於て詳述するが、明治天皇御製を教典とする国民宗教としてのしきしまの道の実践をいふのである。⁷⁷

このような同信生活をどのようなものとして『伊都之男建』誌は論じていたかを点検していくわけだが、それは二項に譲り、その前にまず一項において、昭信会による当時の学

⁷⁷ 『新学生生活論—学生生活叢書第一輯』,東大文化科学研究会,1939.12,p.44

校・学生の状況の捉えられ方を見る。

一項 現状認識

一高昭信会は、彼等の活動の場である学校の現状を、以下のようなものとして認識していた。

教育は国民の統一的生命に基けるそれではなく、分科的各科目に於ける教育、従つてその中にいさゝかの国民的意識をも見出し得ず、個我中心的、永久枯渴的のものである。(……)各学科は独立し分科せられたるまゝに放置せらるゝ結果、卒業生の名は、中等程度の常識所有者と、分離せる放漫知識の蒐集者と換言され得るのである。(……)信念の統一生命を度外視せる一遍的智能教育の無内容にして有害無益なるを顧みなければならぬ。(……)此の如く誤れる教育にその一生を托す学徒の進展開発の途は、その天才に非る限り、無明の冥路に向けらるゝのである。⁷⁸

教授される科目がバラバラになっており、そのために教育は「個我中心的」「永久枯渴的」になっているとの現状認識がされている。そしてこれを克服するためには「統一的生命」に基づく教育がなされねばならない。このような、学課のタコツボ化とそれへの対応としての統一なるものの要請は、『伊都之男建』上でも同様のものが散見され、⁷⁹また、後に確認するように、東文研の『学生生活』上でも頻繁に論及される。ちなみに、このような認識は少なくとも『伊都之男建』創刊以前の雑誌『原理日本』上には管見の限り見られなかった。『原理日本』において高等教育の現状を論じる際には、赤化帝大教授、帝大教授の誤謬思想→帝大改革昭の必要といった論理がもっぱらであった。つまり、学生生活についての昭信会の認識は、原理日本社的言説から独立なものであり、そしてまさにこの点に彼等の運動の特徴があった。

さて、それでは、昭信会はこのようなバラバラな教育を受け、同信生活を営んでいない「同信の友」ならざる一高生について如何なる観測をしていたのだろうか。そのことを確認してみよう。

さなきだに統一（内的のそれ）の無い一高生の生活がこれによつて益々バラバラになつてゆくことをのみ懼れるのであります。⁸⁰

⁷⁸市川安司「教育片論」『伊都之男建』,第一高等学校昭信会,1935.2,p.4

⁷⁹上野唯雄「歴史研究の意義」,同上,1934.1,p.40 などにも類似の指摘あり。

⁸⁰『伊都之男建』,第一高等学校昭信会,1935.11,p.50

ただでさえバラバラな一高生が、より一層バラバラになってしまうことへの危惧が表明されている。⁸¹彼らの現状認識として、学生たちは「バラバラ」な状態に陥っているのである。ただし、後に見るように『学生生活』誌上ほど、その「バラバラ」に対する危機意識・問題意識が強くない、ということを指摘しておく。

二項 同信生活

そしてこの「バラバラ」な状態に対して統一を与えるところのものが、同信生活であった。「同信生活といふものはこの一人々々の生で一人々々の生そのものが支へられぬことを知ったときに生れたもの」なのである。⁸²

同信生活はそして、単に「バラバラ」を避けるためにのみなされるものではない。それは同時に、「ぼくらの前途はこの同信生活の生を拡充してゆく外にとる術はない⁸³」ような、義務的なもの、使命的なものでもある。このような義務、使命としての同信生活が最も明瞭に表れている例として、以下の引用を示そう。

国家の運命を擔ふことは我ら青年の使命であり榮譽ある特權である。それは我々に與へられたる無常最勝の自由、人類永遠の理想の動向に乗托してそれを開展せしむる根本動力であり、(……) それを信ずる吾々は、個人主義の快樂よりも同信団体生活の感激を希求する。この同信団体生活とは吾々にとつてまことには祖国日本の歴史的現實国民生活そのものに外ならぬ。(……) この同信生活の逃避はすなはち人生そのものゝ逃避を意味する、といふことを吾々は生命の法則として信ずる。⁸⁴

自らの使命の帰結として同信生活を行い、さらにそれは、「生命の法則」であり、「祖国日本の歴史的現實的國民生活」、つまり日本人としてあるべき生活の在り方であるがゆえに従うべきものなのだ。この引用から、同信生活が義務的なものとして要請されているようすが分かるだろう。加えて、この同信生活は、ここで「個人主義の快樂」を上回る「感激」をもたらしてくれるものとされている。それは、単に集団で集まることに止まらず、「感激」という「情意」を与えてくれるものである。原理日本社の蓑田も、高等教育におけるこの

⁸¹ ほかに、小田村寅二郎「編集後記」,同上,1938.4,p.36 など。後に確認するように、昭和十四年以降『学生生活』上でも頻繁に同様のことが指摘されているが、より危機的なものとして捉えられるようになっていく。

⁸² 同上,1935.5,p.27

⁸³ 同上

⁸⁴ 「国家の運命と同信生活友情 『向陵衰へたり』といふことに就いて」『伊都之男建』1934.12

「感激」の必要性を訴えている。ただし蓑田においては、それはあくまでも教授科目内容において要請されるものであり、同信生活と結び付けて論じられてはいないことに注意したい。⁸⁵

次に、具体的に同信生活が営まれる例として、合宿を取り上げる。『伊都之男建』上の合宿記を見ると、あまり精神的交流としての側面が強調されていないことがわかる。つまり、合宿によって「同信の友」相互の精神的交流を深め没我の一体感に浸る、といったようなことを強調した記述がみられないのである。合宿の楽しかった日々を思い出として振り返るような書かれ方がなされている。⁸⁶

これは、想定されている読者層の問題であると思われる。『伊都之男建』は不特定多数の学生に読まれることが念頭に置かれていない、あるいは置かれていたとしても意識される読者範囲が狭いため、センシショナルに忘我の一体感のようなものを強調しなかったのではないだろうか。後に論ずるが、この点が『学生生活』におけるものとの大きな違いである。

二節 『学生生活』において

本節では『学生生活』に現れる言説をさらう。ここで節を改めることには、単に雑誌が創刊されたということに加えて、『学生生活』が発刊された時期は運動が全国展開をしはじめる時期であり、想定される読者層が大きく広がっていく、という意味もある。

このことを確認したうえで、一節と同じように、一項では当時の教育に対する認識、二項では同信生活が現れている言説を見ていく。

一項 現状認識

この点については、いきなり創刊号の「趣意書」において表明されている。

⁸⁵ 蓑田胸喜「諸家の思想論策剖検」『原理日本』,原理日本社,1928.10に、「死せる、灰色の概念理論の詰込教育にこそ青年は「反抗」したのである」「彼等が真に求めたものは理論ではなくてむしろ「感激」であった」とある。

⁸⁶ 「合宿日記」『伊都之男建』,第一高等学校昭信会,1935.5,p.19-21、「昭和十年度夏期合宿日記」,同上,1935.10.p27-32,「合宿雑記」,同上,1937.8,p.17など。ただし、昭和九年、昭和十一年度の合宿記は確認することが出来なかったため、全く欠如していると断定はできない。しかし少なくとも、『学生生活』と比べ圧倒的に強調されていない、ということは指摘できる。

総合大学とは単なる名称に過ぎぬが、しからざれば各学部建築物の位置は近接関係の表現以上の何ものでもないかの如くである。否、各学部の研究講義内容も相当の不統一を示してをって学生として相対立分裂した思想に立脚する雑然たる知識の集積の下に自主的批判の余裕すらもなく埋没することはたへがたき苦痛といはねばならぬ。⁸⁷

『伊都之男建』において指摘されていたのと同じように、学課が分裂し、その結果学生は「雑然たる知識の集積の下に」「埋没」しているとされる。この後三か月、学生生活の現状について東文研の会員が論説を書くことは無くなる。高等教育についての論説はいくつか掲載されるが、マルキシズム的であるとの批判論が主だった。⁸⁸背景として、河合栄次郎事件とそれに伴う所謂「平賀肅学」がその頃盛り上がっていたことが考えられる。次に学生生活の現状についての論説が掲載されるのは、二月号である。ここでは、「時局と学生」という特集が組まれて、堰を切ったように、学生の現況について熱のこもった論が展開されている。そのうち二つの論説から文章を引用しよう。

何等の感激もそこにはない。(……)『感情を捨てよ、さらば開かれむ』と大学の門には告示されてゐるのだ。(……)青年たることをやめよ、自立の人たることをやめよ、(……)機械となれ、奴隷となれ、と、かく大学構内の空気はたえずやみなき無音のひびきを波動せしめてゐる。⁸⁹

現代の日本の学校教育なるものは、おしなべて自由主義・個人主義的偏理主義に傾向せむとするのであつて、いささかも確乎たる国家観・人生観の養成に寄与せぬのである。(……)もろもろの悪徳欠陥の思想的総本山は、東大法経文学部の、祖国蔑視、西欧拝跪の心理によつて醸成せらるゝ遊戯的概念的諸学風であることを、大声指摘せねばならぬのである。⁹⁰

もはや呪詛に近い弾劾であるが、要するに、現行の高等教育機関は自由主義・個人主義・理知主義に傾いており、そこでは「情意」的なものが抑圧され、学生たちは機械のようになることを強いられているのである。七月号には「教育の意義は一変せり—学生運動の必

⁸⁷ 「趣意書」『学生生活』,東大文化科学研究会,1938.10,p.2,『集成 1』 1,p.208

⁸⁸ 夜久正雄「対戦の殷鑑と日本教育界」『学生生活』,1938.11,p.24,25,『集成 1』 1,p.262,263
「巻頭言 大学の顛落」『学生生活』,1938.12,p.2,『集成 1』 1,p.276,上野唯雄「高等学校在学の諸兄に寄す」同上,p.26,『集成 1』 1,p.300 など

⁸⁹ 田所広泰「大学は如何にして改革せらるべきか」『学生生活』,1939.2,p.10,11,『集成 1』 1,p.380,381

⁹⁰ 宮脇昌三「国家興亡戦と学生—全国高等学校の現状—」同上,p.12,13,『集成 1』 1p.382,383

然性とその方向一」と題して、ここまで見てきたような学生協会の現状認識を総括的に論じ、さらにより踏み込んで高等教育について述べた論文が発表される。筆者は田所広泰、掲載号の前から発表が予告され、分量も三段組で九頁にわたる力の入った論文である。長くなるが、以下に引用する。

諸君は学校生活に真の喜びのないことを認められる。(……) 学生は青年である。青年とは本質的に未来に希望をもち現在に生の躍動を感じねばならぬものである。果して然らば感激と歓喜とを「奪」ふことなしに、青年より喜びを失はしめる途はない。(p. 5)

先生方は(……) たゞ学生生徒のノートに何年乃至何十年以前に、生徒と同じやうに書込まれたまぢまぢのきたない筆跡で印刷すればよいのである。先生とは、実に講義案の「紙型」であれば足りるのだ。既に先生がかく責任の地位にない。(p. 8)

分裂せる学課内容と継ぎ合はされた知識の断片、暗記強制秀才教育と非能動的消極的知識階級の性格、実験演習を用ひぬ講義儒依教育と思想的無批判、宗教芸術ことに詩的教育の欠如と人間の機械化(p. 10)

時代を負へる青年がこゝに団結し、教育するものと教育せらるゝものとの分たれぬ交流の中に、大きな新しき雰囲気を醸成し、内発的時代精神の火を炎上せしむるときに、一いまや、教育の意義は一変せることを世の人々は凡て正視せねばならぬのである。(p. 12)⁹¹

青年が情意を抑圧されているとの指摘のほかに、それをもたらしている具体的な学校の現況の例がいくつか挙げられている。ここで、上記引用に見られる認識は、一章で確認した昭和十年代の高等教育に関する一般的な認識と重なることに気づかれない。つまり、学生協会による現状認識は時代適合的、一般的なものだったのである。否、むしろ、より透徹していたとすら言えるかもしれない。

二項 同信生活

そして、当時において現れる問題に対応するものとして、同信生活が措定される。このような、学生のバラバラ化以外の問題への解決方策として同信生活が明確に強調されるのは、恐らくこの時期以降である。⁹²具体的な問題解決方途としての同信生活の例は、例えば、各地で開催された各校別全国学生合宿を背景に昭和十四年十二月に刊行された『新学生生活論』において次のように同信生活の機能が説かれている。

⁹¹ 田所広泰「教育の意義は一変せり—学生運動の必然性とその方向—」『学生生活』1940.7,p.4-12,『集成 1』2,p.140-148

⁹² 『伊都之男建』については全巻号が未だ確認できていないため、推測に止まっている。

同信生活に於ける学術研究は、今日の学界に於て最も憂ふべき専門分科の割拠の弊を正して、一貫せる原理と研究方法とに立脚せる複雑にして同時に簡明統一ある学術体系を建設せんとする。⁹³

同信生活が、学生が直面する問題への対処方途として打ち出されていることがよく理解できるだろう。

このような同信生活の位置づけは、他に例えば以下の引用にも見える。やや時期は下るが、『新指導者』昭和十六年四月における「特集 学生運動の体験」と題された特集のなかで、匿名の高校生が寄せた文である。

同信生活に於ける共同研究は、実にこの精神科学を内より支へる体験—止まることを知らぬ生命そのもの—そのまゝに行はれなければならない。(……) かく共同研究は(……) 行はれねばならぬのであって、さうすることによって、始めて先に述べた概念と事実との一致も行はれ得るのである。つまり学問に於て最も陥り易き固定概念に捉はれることが、共同研究に於ては打はされ得るのである。(……) 多くの友が一室に集つて同じ思ひに、感激に打ちふるへながら、学問の研究を行ふ、といふことは、まこと新しき学生生活の重要な一形態であらう。⁹⁴

先の『新学生生活論』では専門分科の統一が同信生活によつてもたらされるとされたが、ここでは、「同信生活に於ける共同研究」は、理智的な「固定概念に捉」はれた状態を打破するもの、とされている。いずれの論説も、現代の学生が落ちている陥穽から学生を掬い出し、新たな、正しい、学問への道へ至らしめるものとして、同信生活が措定されていることがわかるだろう。

ここまで見てきたように、学生協会の運動においては原理日本社的言説においてはあまり強調されない同信生活という身体的実践が非常に強調され、重要な位置を与えられていたことがわかる。そしてそれは、学生が置かれている状況を打開し、彼等が直面している問題に対処するためのものでもあった。

二節 学生協会の運動の受容のされ方

二節では、学生協会の運動が、当事者である学生たちに、どのようなものとして受容・

⁹³ 『新学生生活論 一学生生活叢書第一輯一』, 東大文化科学研究会, 1939.12, p.45

⁹⁴ 白樺生「我等の共同研究」 「特集 学生運動の体験」 『新指導者』, 日本学生協会, 1941.4, p.79 『集成1』 4, p.79

表象されていたのかを伺う。そのために、まず一項において昭和十四年七月の全国学生合同夏合宿の宿参加者から寄せられた便り、二項で昭和十五年六月の学生協会設立記念講演会に聴衆として集まった便りを、それぞれ分析する。

一項 昭和十四年における全国学生合同夏合宿参加者からの便り

この項の目的は、昭和十四年七月に開催された、全国学生夏季合同訓練と題された夏合宿に参加した学生からの便りを分析することである。この合宿は、昭和十四年七月、一七日から二五日までの七泊八日にわたって神奈川県は無量光寺において開催され、全国二六の学校から約一五〇人の学生が集った。合宿一日目の十八日には、この合宿運営の本部長である田所広泰が講演し、合宿の意義を語った。一部を引用しよう。

我々が学生運動をやつてゐることは、新しき時代をひらかんため、それは欧米の低き精神征覇の時代をきりひらくためにいかに努力すべきかといふことを研究しその方法を実現せん為に学生運動をやつてゐる。それは百年数年の問題である。我等がこゝに協力の方法を考へること、学生運動の必然性を考へること。この二点が重要である。(……) この合宿が成功したか否かにより国民思想生活の改革が出来るか否かが決定される。⁹⁵

このように非常に熱情に溢れる講演が合宿第一日目にぶたれた。しかし、皮肉にも、開催中に合宿内で猩紅熱という高熱、下痢、嘔吐などの症状をもたらす感染症が発生してしまう。十数名が臥せり、一人が緊急入院してしまうなど、合宿は万全のものとはならなかった。そのことも手伝ってか、ここにおいてはそれほど、合宿における深い精神的交流、は強調されていない。四日目の二〇日によろやく「夕食まで二班づゝ合同のフリートキング、日の経つに従つて親密の度を加へ思想的交流も出来つゝある」という状況である。その後、あまり前兆もなく、最終日の前日に「我らの心は今完全に一つに結びついてゐる」と記述された。合宿のイベントとしては、陸軍大佐による国体論、歌人中川与一による日本文化論、蓑田胸喜の演説、三井甲之の講演などが行われ、愛国意識の涵養がはかられた。

⁹⁶

さて、それでは、この合宿を、参加者たちはどのようなものとして受容したのだろうか。合宿記が掲載された『学生生活』の昭和十四年九月号には、「合宿より帰りて」として、合宿参加者からの便りが掲載されている。以下、この内容を分析し、合宿参加者の合宿の捉え方を見る。まず、掲載された便りは二十名分である。ただし、一人は合宿序盤で緊急入院した者であるため排除し、十九名分について考える。以下は、便りに記述してある内容

⁹⁵ 「全国学生夏季合同訓練記録」『生活』,1939.9,p.7,8,『集成 1』 1,p.118,119

⁹⁶ 「全国学生夏季合同訓練記録」『生活』,1939.9,p.6-17,『集成 1』 1,p.118-129

の表である。内容は、合宿における精神的交流の感動・よろこびについてと、愛国・憂国・尊王的な内容に関するもので分類した。分析の際にはそれぞれ、精神、愛国と表記する。当該項目の内容についての記述がある場合には1、無い場合には何も入力していない。

	精神	愛国
学生 1	1	
学生 2	1	
学生 3	1	1
学生 4	1	
学生 5	1	1
学生 6	1	
学生 7	1	1
学生 8	1	
学生 9		
学生 10		1
学生 11	1	
学生 12	1	
学生 13	1	1
学生 14		
学生 15	1	
学生 16		
学生 17	1	
学生 18	1	1
学生 19	1	1
合計	15	7

注) 『学生生活』,東大文化科学研究会,1939.9,p.37-41より作成。⁹⁷

一九名という限られた人数の内ではあるが、精神はが15で約78.9%、愛国は7で約36.8%となっている。精神かつ非愛国は約53.3%、つまり、精神だけしか書かなかったものが半分以上である。この掲載された手紙からは、まず、愛国的、憂国的なことよりも、精神的交流が重視されているという傾向がうかがえる。さらに精神的交流を重視しているものうち過半数は愛国的な感想を書く必要を認めていない。『学生生活』誌が愛国的な表現をわざわざ削除する理由は考えられず、むしろ両方記述されているものが雑誌の方針に合致することを考えれば、編集によって、今読み取った傾向が助長されてしまっている可能性はかなり小さいといえよう。しかも、この合宿では感染症が発生しておそらく満足に精神的交流を深めることが出来なかった。他方、国家主義的な演説はほぼ毎日なされているのである。このような条件も踏まえれば、少なくとも傾向としては、合宿参加者は国家主義的、愛国的な思想面よりも、仲間との精神的交流という意味でこの合宿を受容していたと言えるだろう。参考に供するために、便りのうち一つから引用しよう。

貴重なる約十日間に亘る合宿生活を終へて刺戟の少い環境にもどり、個人生活を送る様になると、ともすればゆるみがちな心が悲しく我々同信の友らの中に生きるといふことの如何に力強く尊いものであるかを深く感じます。我々はしきしまのみち、臣道としての

⁹⁷ 「合宿より帰って」,同上,p.37-41,『集成1』1,p.149-153 番号は、右から左に昇順でふった。

みちを反省体得してゆくと同時に、同信の友らへの心のつながりを強固にしてゆきつゝ
す々まなければならぬと思ひます。⁹⁸

二項 日本学生協会結成記念大講演会

この項で見るのは、昭和一五年六月一五日、開催された、日本学生協会結成記念大講演会に寄せられた便りである。講演会に冠された文言通り、これは日本学生協会の設立を記念して催されたもので、東京の神田一ツ橋共立講堂に約二千名の聴衆を集めた。学生からも社会人からも便りが寄せられ、その数は三〇〇通以上に及んだとされる。その三〇〇通以上の便りのなかから、三九通が『学生生活』七月号上に掲載されている。以下は、便りの送り主の分類と、記述してある内容ごとの合計数の表である。まず、便りの送り主は、(男子) 学生、女学生、それ以外で分類した。次に、内容については、現行の教育・学生の在り方に対し批判的な記述、感激・よろこびなどを求めている記述、愛国・憂国・尊王的な記述、の三つに分類した。それぞれ、分析のなかでは教育、感激、愛国と表記する。当該分類にあたる記述がなされている場合には 1 とし、なされていない場合には何も入力しなかった。⁹⁹

⁹⁸ 楠川邦補「合宿より帰りて」,同上,p.41,『集成 1』 1,p.153

⁹⁹ 「講演会感想録」『生活』,1940.7,p.25-31,『集成 1』 3,p.161-167 番号は、便りの書き手の分類ごとに、右から左に昇順でふった。

	教育	感激	愛国
学生1	1	1	
学生2	1	1	
学生3			1
学生4	1	1	1
学生5	1		
学生6	1		
学生7	1	1	
学生8			1
学生9	1		1
学生10	1		1
学生11	1	1	
学生12	1	1	1
学生13	1	1	
学生14		1	1
学生15	1	1	1
学生16	1		
学生17	1	1	
学生18	1		1
学生19	1		1
学生20	1		1
学生21	1	1	
学生22			
学生23	1	1	
学生合計	19	12	11
女学生1		1	1
女学生2		1	
女学生3			
女学生合計	0	2	1
非学生1			1
非学生2	1		1
非学生3			1
非学生4			1
非学生5			1
非学生6			1
非学生7	1		1
非学生8			
非学生9	1		1
非学生10			1
非学生11			1
非学生12			1
非学生13			1
非学生合計	3	0	12
総合計	22	14	24

注) 『学生生活』,東大文化科学研究会,1940.7,p.25-31より作成。

まず学生に関するデータに注目すると、内容ごとの合計数はそれぞれ、教育が最大で19(約82.6%)、次に感激が12(約52.1%)、最後に愛国が11(約47.8%)となっている。まずここから、感想の八割以上は教育を含み、愛国を含むものは半数以下であることがわかる。女学生と非学生のうちでは教育は約18.8%で、愛国は68.8%であることを考えれば、学生において教育がほとんどを占め、愛国は半分未満であることは、講演の内容がいずれかに偏っているためではない、ということがわかる。

さらに、教育かつ非愛国が11であり、教育における割合は約57.9%、つまり、学生・教

育の現状に対する不満、批判を書いたうちの六割近くは、愛国的な言明をなしていない。一方で、教育かつ感激もまた同数の 11 となっており、逆に、教育に対する不満、批判を書いた学生の六割近くは、学生協会の講演を聞いて感激したり、あるいは感激を求めたのである。

つまり、特に学生にとっては、学生協会とは共鳴すべき愛国思想を持つ団体であるよりも、自らの閉塞的な現状に変化をもたらす感激を与え得る団体だったと、少なくとも感想録からは言っているのである。

ここでもまた、イメージをしやすくするために、便りのうちの一つを紹介する。

過去に於て、私も個人主義・合理主義観念のために内心の苦痛を経験しました。それは高等学校に於てゞあります。(中学に於ては、さうしたことは殆どなかつた。)例へば、友人に負けぬやう成績をよくしたい、然し競争のために勉強することの内心の不愉快さをどうすることも出来ぬ、といったやうな二律背反的気持に苦しんだのであります。それは個人中心的であつたからだ、今ははつきり云ひ得るが。(……)高校生活の感激などといふものは味はふことも出来ず、大学入試勉強に心をまぎらはさざるを得ないやうな始末になつて行つたのでした。(……)心の拠り所を求めつゝも、その求道に徹し得ない空漠感でした。(……)田所氏が現代学生がこの合理主義に悩んでゐることを指摘せられ、そして氏の十三年間に亘る苦情を吐露された時は、私は心からの共感を覚え、泣けたのであります。¹⁰⁰

学校の現状に不満やるかたない思いを抱き、何か確固たるものを求めていた、そのような心情がはっきり伺えるだろう。

四節 小結

学生協会はその一高昭信会時代から、学校・教育の現状に対する問題意識を持ち続けており、さらに同信生活という身体的実践を非常に重視していた。学校・教育に対する問題意識にまつわる言説も、同信生活を非常に重視する思想も、原理日本社的な言説から逸脱した、学生協会に独自のなものであった。そのような同信生活は、バラバラになってしまう学生を共感の世界に至らしめ、かつ、学課のバラバラという教育上の問題を解決するものであった。

そして、実際に運動に参画した学生もまた、学生協会の運動の、精神的交流、感激といった、同信生活としての側面から表象しているものが多かったことを、手紙の分析を通じて示した。

100 出沢隆夫「講演会感想録」『生活』,1940.7,p.25,『集成 1』 3,p.161

第六章 結論

本章では、ここまで論じてきたことを総括して述べる。まず、学生協会の運動が澎湃とした勢いを獲得していく一九三〇年代とは、既存の「教養主義」的な学生が動揺し、頹廢的、利己的、まとまりがない、そんな潮流が学生の中に瀰漫していた時期であった。(第二章) 学生協会の言説と実践は、そのような状況に置かれていた学生に受容されたのである。

学生協会の言説の型は、原理日本社的言説のほとんど焼写しであった。原理日本社的言説の中身を、簡略に言えば、最も確実なものとしての「日本」を感得しそれによってすべてを統一する、というものであった(第一章)。そこでは、最も大切なものは「日本」である。原理日本社的言説は、学生協会の運動の指導層のみならず、より周辺的な運動参加者においても共有されていた。言説の型を習得するという行為は、当該言説をあるべき・従うべき型であるとして、自らにコード化するということを意味している。このような意味においては、それは、「教養主義」よりも新しい文化の型だったのではないだろうか。(第四章)。さらに彼等の実践は、「ばらばら」になってしまっていた学生を共感・一体感の世界に導き、加えて学課の分裂という教育上の問題をも克服するものだった。運動に触れた学生たちも、彼等の原理主義的日本主義という思想面だけでなく、あるいはそれ以上に、運動が自らが置かれていた不満足な状況を打開するものとして運動を捉えていたと考えられる。(第五章)

原理主義的な日本主義思想は、その言説としての型は維持されながらも、幾重かのエンコードとデコードのなかで、当初そうであったものとして以外の意味をも見出され、学生たちに受容されていった。

おわりに

書きたいこと、不十分な点はまだまだあるが、ひとまず、書き終えることができたことをここでは素直に喜びたい。この論文は、実に、実に多くの人にお世話になり、成り立ったものである。感謝の念を表明すべき方はほとんど無限にあり、本当は名前が分からない方も含めて個別に挙げて謝意を表明したいと思うが、筆者の根性の問題でそれは叶わない。これはSFCの学士論文であるから、代表して、三年間にわたって警咳に接することを許して頂いた小熊英二先生に感謝の念を述べ、本稿の締めとしたい。本当に、ありがとうございました。

参考文献 (脚注で触れたもの以外)

- 木下半治 『日本右翼の研究』 現代評論社, 1977
- 昆野伸行 『近代日本の国体論 〈皇国史観〉再考』 ペリかん社, 2008
- 須崎慎一 『日本ファシズムとその時代』 大月書店, 1998
- 竹内洋編、竹内洋、上村和秀、片山杜秀、福間良明、井上義和、石田あゆう、佐藤卓巳著
筒井清忠 『日本型「教養」の運命：歴史社会学的考察』, 岩波書店, 1995
- 新見重夫 「(10) 高等学校と学寮と自由の生活 (第八高等学校・昭和十一年)」 『旧制高等学校全書』 6, 旧制高等学校資料保存会刊行部, 1985
- 荻野富士夫 『戦前文部省の治安機能—「思想統制」から「教学錬成」へ』 校倉書房, 2007
- 橋川文三 『昭和ナショナリズムの諸相』 名古屋大学出版, 1994
- 松本健一 『思想としての右翼』 論創社, 2000